



# 小唄レビュー 抒情双六 1929(昭和4)年

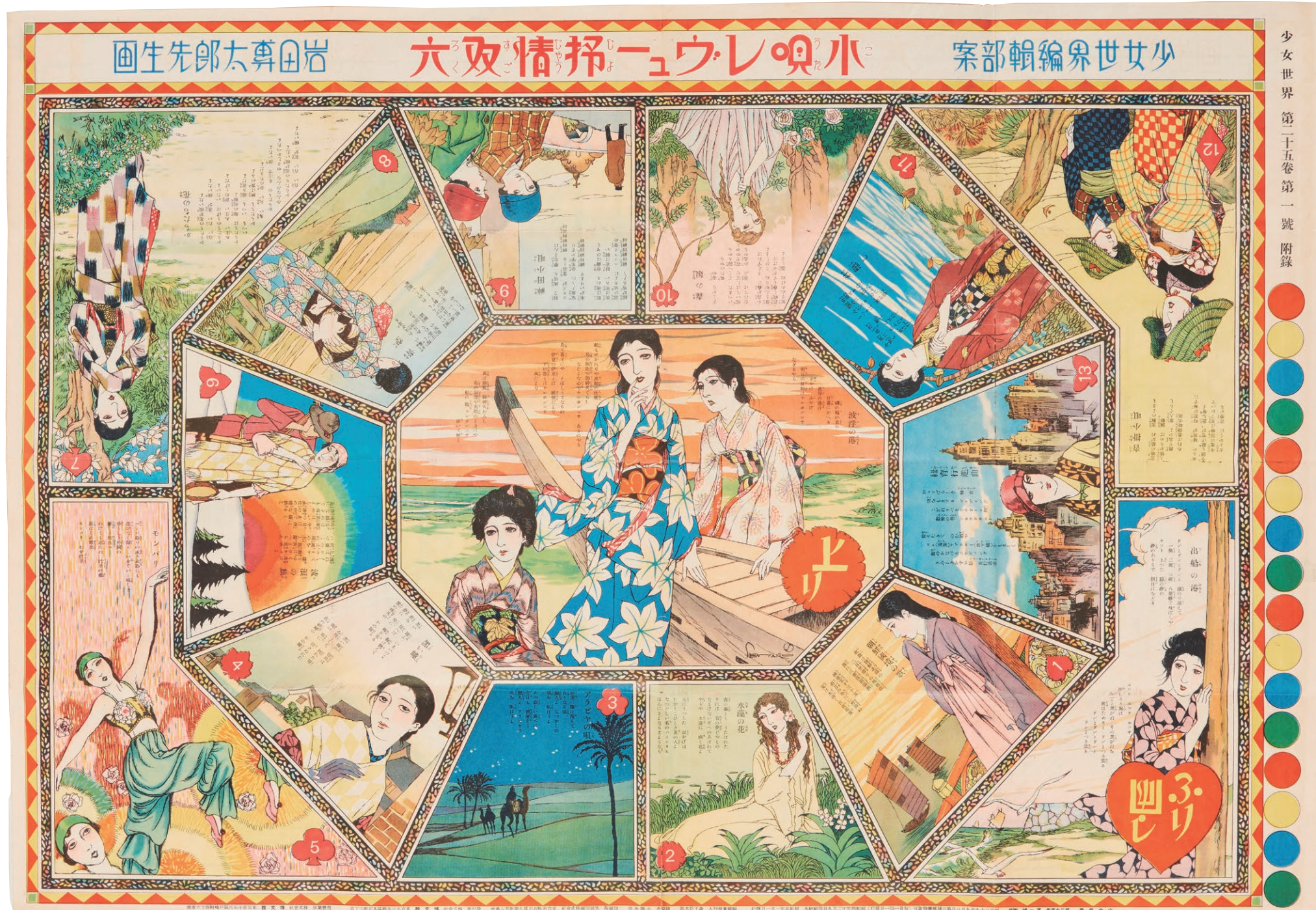
大正ロマンチズムの旗手であった岩田専太郎が、世界を舞台にした抒情歌の歌詞に挿絵を添えています。独特の憂い顔の女性が各国の華麗なファッションを身にまとっている、アールヌーボー調の絵双六の傑作です。少女時代を過ぎても、ずっと手元に置いておきたいくなる気持ちがわかります。

登場する一五の歌は当時の流行歌。「朝鮮国境の歌」「アラビヤの唄」「黒い瞳」「モンパリ」「流浪の旅」「からたちの花」「森の娘」「君恋し」などです。

岩田の描く女性は、長い睫毛と見事なプロポーションの美人です。この画風が当時の少女の異国への憧れを掻き立てたのでしょう。「モンパリの娘」のコマ、測ってみたら九頭身もありました！

この双六が作られた年、田中義一内閣が総辞職し、濱口雄幸内閣が成立しました。アメリカでは、フーヴァー大統領の就任後、ニューヨーク証券取引所で株価が大暴落し、世界恐慌の引き金となりました。

今回で1年間の連載を終了します。多くのスゴロキアン(双六大好き人間)に多謝感謝です。(了)



ジャズの名曲「紐育行進曲」  
原曲は1924年発売の「I'm gonna bring a watermelon to my girl tonight (今夜あの娘に西瓜を持っていこう)」。軽快で陽気なジャズです。当時のアメリカは、狂騒の20年代と呼ばれ、空前の大繁栄をとげ、大量生産・大量消費の生活様式が確立し、ラジオ放送やレコードが普及しました。



上りは「波浮の港」  
上がりは3人の少女が小船の周りに風情ありげに集うコマ。波浮の港にや、夕焼け小焼けの名調子ですが、作詞家の野口雨情は、たった1枚の写真を見てこの詞を作ったといわれています。じつは波浮の港からは沈む夕日は見えないそうです。

振り出しは「出船の港」  
振り出しは「出船の港」。柱に寄りかかり遠くを見つめる風情の女性。日本の男性オペラ歌手の草分けである藤原義江の歌声が聞こえてきそうです。

画：岩田専太郎  
編集兼発行人：森下岩太郎  
印刷所：共同印刷  
発行所：博文館  
サイズ：縦55cm×横80cm  
雑誌「少女世界」1月号の付録。  
所蔵＝吉田 修 写真＝鶴崎 巖

文・監修 吉田 修  
よしだ・おさむ ●1954年生まれ、島根県松江市出身。全国求人情報協会常務理事、NPOキャリア権推進ネットワーク広報部長、和文化教育学会会員を務めるかわら、築地双六館館長として双六の蒐集・研究・制作に取り組む。  
公式HP＝http://www.sugoroku.net